



Title	オストロゴルスキー研究—コーカス論をめぐって—
Author(s)	成田, 博之; NARITA, Hiroyuki
Citation	北大法学論集, 29(3-4), 359-379
Issue Date	1979-03-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/16271">https://hdl.handle.net/2115/16271</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(3-4)_p359-379.pdf



# オストロゴルスキー研究

——コーカス論をめぐって——

成 田 博 之

目 次

はじめに

第一章 パーミンガム・コーカス

第二章 自由党コーカス

第三章 自由党コーカスの崩壊

おわりに

はじめに

オストロゴルスキー<sup>(1)</sup> (Михей Яковлевич Острогорский, 1854-1919) は、従来、イギリスおよびアメリカの近代政党史研究の開拓者として評価され、その角度からのみ論述されてきたと言ってよい<sup>(2)</sup>。そのとりあげかたも彼の政党史研究自体に検討を加えるというよりは、両国の政党研究をすすめるうえの一資料として扱うという色彩がよかつた<sup>(3)</sup>。また、M・ウェーバーが、彼の研究をもとにして「名望家政党」と「大衆政党」という区分を行ったのちは、そ

の視点からオストロゴルスキーの政党論を読みなおす試みがなされてきた。

オストロゴルスキーの研究対象はイギリスとアメリカの二カ国であり、時期的にもせいぜい一九〇〇年代初頭までであるから、今日においては彼の研究がもつ意義もきわめて限られているし、その著作が政党論の古典として位置づけられるのも無理からぬことであろう。しかし、実証的な政党研究を遺した一政治学者というとらえ方から離れて、もうすこし視野をひろげ、デモクラシー批判を展開した思想家としての彼の生涯に目をむけるときには、彼の政党論を新たな視点からとらえなおすことができるのではなからうか。

本稿は、イギリスで本格的に政党組織が確立される一八八〇年代以降、特にコーカス組織の形成過程に関するオストロゴルスキーの論述を対象として、彼の政治思想の特徴を探ってみようとするものである。こうした角度からオストロゴルスキーをとりあげるとき、直ちに次のような疑問が生ずる。彼は一体政治思想とよべるような体系化された思想をもっていたのか、ということ、また、もっていたとして、それをどのように展開しているか、ということである。彼が政党研究をはじめたのは一八八七年頃である。この時期は、イギリスにおいてコーカス組織がほぼ完成され、政党に包摂される過程がはじまる時期であった。彼は、新しく誕生し急速に変化を遂げていたコーカスという組織形態を研究の対象として選択したわけである。労働党はまだ結成されていなかったとはいえ、それを生み出す条件は整えられつつあった。したがって、彼が精力的に研究をすすめた時期は、政党制そのものの過渡期でもあったと言い得る。

彼の関心は、民主的政府がどのように運営されているのか、という点にあった。しかもオストロゴルスキーにとつては、それまで研究対象となっていた民主的政府の形態ではなく、これを実際に動かしている政治勢力の活動こそが重要だったのであり、なかでも、多少なりとも規則性を持ち、何らかの活動体系をそなえた政治勢力が観察のために

は好都合であった。これが、コーカス・政党なのである。「政党は政治社会そのものである」と彼は言う。彼の政党分析は、民主的政府の実質を把握するための主要な手段であった。

民主的政府の実質を把握することは、旧体制の崩壊に伴って、秩序から放出された個人、権力の主体と宣言された平等な個人を如何にして再び社会につなぎとめ得るかという彼の問題意識にとつては、不可欠の前提であった。「憲法規定外の厳格で恒常的政党」<sup>7)</sup>がその解決策のひとつとして用意されたわけであるが、政党は果してそのような要請に応え得るものなのか、また、それは社会や個人にどのような影響を及ぼしているのか、という疑問を彼は持ちつづけていた。コーカス組織の解明は、このような問題関心をもったオストロゴルスキーの政党分析の出発点であった。それゆえ、彼の政治思想を探る作業も、ここからはじめられるべきであろう。本稿がコーカスについての論述を対象とするゆえんである。したがって本稿は、彼の研究を素材としてイギリスにおける政党の発展を跡づけることや彼の政党論の構造を検討することを目的とするものではなく、オストロゴルスキーの政党研究を支える思想を抽出して、政治思想史におけるその位置を明らかにするための一試論である。

- (1) その生涯については、これまで、ほとんど知られていなかった。この点につき成田博之「M・Я・オストロゴルスキーの政治思想」横浜国立大学人文紀要、第一類、第二十二輯二四一—四〇頁参照。なお生年については一八五二年とするものもある。「Члены государственного Думы, портреты и биографии. Связь 1-4 М., 1906-13.», стр. 82.
- (2) S. M. Lipset ed., M. Ostrogorski, Democracy and the Organization of Political Parties, 1964, p. xiv 等。
- (3) 横越英一「近代政党史研究」一九六〇年、四三—五二頁以下、池田清「政治家の未来像」一九六二年、二六—三三頁以下、河合秀和「現代イギリス政治史研究」一九七四年、二九—三〇頁以下、Didier Lanciaen, "La formation des partis politiques", Revue Historique, Nr. 521, Janvier-mars, 1977, pp. 27-80, 等。
- (4) 升味準之輔「現代政治と政治学」一九六四年、一七五—一八二頁以下、吉瀬征輔「オストロゴルスキーの政党論の論理」『政治研究』

一三号、一九六五年、四五ページ等。

(5) M. Ostrogorski, *La démocratie et l'organisation des partis politiques*, 1903, TOM. 1, p. 559. これまで、オストロゴルスキーの「デモクラシーと政党組織」を論じたり、引用したりする場合、ほとんどF・クラークが翻訳した英語版 *Democracy and the Organization of Political Parties*, 1902 が用いられてきた。翻訳者は翻訳にあたって、著者と緊密な打ちあわせの下に進めたと述べており、原著の趣旨を生かすべく努力がはらわれている。しかし、細かな語句のくいちがいが、原著にない章句の付加および原著の一部の削除なども多く見受けられる。本稿は原著版を底本とする。

(6) *op. cit.*, p. 1.

(7) *op. cit.*

## 第一章 バーミンガム・コーカス

オストロゴルスキーの政治社会分析の素材とされたものは現実の政治勢力であり、観察の対象とされたものは政党であった。分析に際して、彼は、一方で個人対社会という自由主義的図式に則った「個人」<sup>(1)</sup>を視座の中心に据えながら、他方、階級概念である貴族、ブルジョアジー、プチ・ブルジョアジー、労働者階級、および、未だ政治的舞台に登場するに至っていない大衆という概念をも用いている。これらの諸概念は、これ以上細かく分類されることもなくまた、実質に立ち入って検討されてもいないが、諸階級相互間の対立、融合、分離の過程、とりわけブルジョアジーが貴族支配にとつかわる時期については、生き生きしたみごとな歴史的叙述をみせている。<sup>(3)</sup>

この実証主義的観察にもとづく階級論的アプローチと抽象的社会—市民図式に則った規範論的アプローチの無差別な併用が彼の議論を不透明なものにしていることは否めない事実であり、コーカスにかんする叙述もその例外ではない。たとえば、コーカス組織の成立に至る過程を論ずる部分は階級論的アプローチが活用されている好例であらう。

これにたいして、コーカス組織を分析している部分では、規範論的視点が顕著に示されている。オストロゴルスキーの政治思想を検討するための素材としては、後者がより有効だと考えられる。規範論的アプローチは彼の自由主義的価値観に立脚するものであり、したがって彼の政治思想を反映するものにほかならないからである。

一八六七年にイギリスの選挙法が改正され、翌年コーカス形成の母体となるパーミンガム計画が発足した。選挙権の拡大をデモクラシーの発展と考えていたオストロゴルスキーにとって、この年はまさに運命の年なのであった。パーミンガム選挙区の定員三名の全議席の自由党による独占をめざしてチェンバレンを中心とするパーミンガム急進派の指導の下にはじめられたこの計画にもとづいて、自由主義協会（以下コーカスと称する）の組織が確立される。

コーカスは「地区委員会」「執行委員会」「総委員会」および最高機関である「運営委員会」の四者により構成された。一六に分割された居住区ごとに設けられた最下級の「地区委員会」は、当該地区の居住者のうち協会の方針に賛同し規律に服する者を、投票権の有無や党費納入の如何を問わず、誰でも仲間として迎え入れた。「地区委員会」の構成員は一般会員全員による投票で選出され、定員は各地区別に自主的に定めるものとされていた。選出された委員長は、協議により地区の有識者のなかから若干名の推薦委員を加えることができ、全委員によって選ばれた議長・書記長を含む五名の代議員の総計八〇名と彼らが任命する推薦委員三〇名の計一一〇名が「執行委員会」を構成した。

「総委員会」は一般会員の公選により地区ごとに三〇名選出された委員四八〇名と「執行委員会」の構成員一一〇名にコーカスの会長、副会長、会計担当者および書記を加えて総計五九四名によって構成された。これがいわゆる「六〇〇人組」である。「運営委員会」は「総委員会」を選出母体とする会長以下四名の事務担当者と「執行委員会」の委員中から選ばれた七名の計十一名からなっていた。

「運営委員会」は選挙に際してコーカス構成員の票数につき事前調査を行い、そのうえで三人の自由党候補者を当

選させるために必要な票数を算定して各地区に二名ずつの候補者を割当て、投票にあたってはこれを連記すべき旨を全会員に指示した。この試みは功を奏し、一八六八年の選挙で自由党はバーミンガム選挙区の議席を独占した。のみならずこの組織は一八七三年にチェンバレンを市長に当選させ、彼による市政改革に積極的に参画してこれを成功に導き、ついにはコーカスマンバーが市議会のみならず他の公共機関の役員まですべて独占するに至った。

オストロゴルスキーはコーカスが旧来の指導者にかわる新しい型のリーダーシップを創り出したこと、および市民の政治教育に大いに貢献したことを評価しながらも、急進主義のスローガンである「国民への信頼」を具体化したこの組織方法にたいして懐疑的な見解をもっている。彼の批判は、バーミンガム・デモクラシーを担保する手続きとみなされる各級委員会構成員の「公選制」の実態にむけられる。「六〇〇人組は、運営委員会の委員のうち四名を任命するだけで、残りは執行委員会が任命する。執行委員会は推薦委員三十名を含む集団であり、しかも推薦権をもつ八十名のうち五分の二は人数に制限のない地区委員会による任命である。組織の基本にある地区委員会が堅固な独立心をもつ代議員を任命すれば、彼らを上部から操作しようとする企てはすべて失敗に終るであろう。この組織の中心人物の巧妙さは、まさに、地区委員会を支配して、彼の信頼に依る代議員を選出させた点にこそ存した」と彼は指摘する。オストロゴルスキーによれば、外観上極めて民主的な「公選制」は、国民の自発的な選択権を排除するための防壁に他ならないのである。このことは「三人の候補者のうち任意の二人を選ぶことの放棄」をコーカス員に強いる投票方式についても妥当する。「言われたとおり投票せよ」というコーカスの指示は有権者の選択の自由を奪う機能を果すものではないか、と彼は疑っていたわけである。

「バーミンガムの保守党は、あらゆる政治的領域および非政治的分野から排除された。保守党の集会はコーカス支持者の一大団の大きさによって妨害されている。組織はこれを防止しようとせず放置している」とオストロゴルスキ

一は記し、この事実から、コーカスは妨害者たちと共犯関係にある、と断定する。

オストロゴルスキーは、誕生したばかりの「民主的な」コーカス組織が個人の内発的な意思を巧妙に操作する機能を具えていることを批判していた、と言い得よう。この操作は、彼の自由主義的価値観とは相容れないものだったのである。

(1) M. Ostrogorski, op. cit. TOM 1, p. 27, 34, 41, 42, 52, etc.

(2) op. cit. p. 21, 116, 120, etc.

(3) op. cit. p. 38 sq.

(4) op. cit. p. 173 第二次選挙法改正の成立経緯については、河合、前掲書、一三ページ以下、岩波講座「世界歴史」第二〇巻、一九七一年一八二〇ページ。

(5) op. cit. pp. 154-155.

(6) op. cit. p. 157.

(7) op. cit. p. 151.

(8) op. cit. p. 159.

## 第二章 自由党コーカス

パーミンガムにおける輝かしい実績は急進派を勢いづかせた。コーカスメンバーはチェンバレンを中心として、この組織方法をイギリス各地に拡大すべく宣伝活動を精力的に行った。一八七四年の総選挙で保守党の大勝を許したことを契機として、グラッドストンの率いる旧来の指導者層に対する不満が高まるなかでパーミンガム方式は次第に受

容され、「六〇〇人組」をモデルとする多数のコーカスが組織された。

大衆的政治運動としてのコーカスが全国的に注目されたのは反トルコキャンペーンにおいてであった。一八七六年から一八七八年にかけて行われたトルコ軍によるブルガリア人の大量虐殺にたいして、自由党はこれを厳しく非難する抗議活動を展開したが、各地のコーカスはこれに呼応して大衆的な抗議行動を繰返した。

オストロゴルスキーは、これらの抗議行動を国民の自発的・自然発生の感情の発露として評価するが、これを指導したコーカスについては次のように述べる。「グラッドストンの煽動によって惹き起された興奮はまもなく鎮つた。そしてコーカスの集会和デモンストレーションは情性とベアミンガムの指令によって続けられたにすぎない。しかもこれは人々をより聡明にするために役立つはしなかつた<sup>(1)</sup>」。彼によれば、大衆の直接行動がディズレリー内閣の打倒を呼号する反政府運動へと変質したのは、もっぱらコーカスの活動によるというわけである。

反トルコキャンペーンがきっかけとなつて東方問題を討議するために開催された各コーカスの代議員大会を基盤として一八七七年にはベアミンガムで全国自由党連合の結成大会が開かれ、コーカスは全国組織にまで発展した。一八八〇年の総選挙では自由党が勝利を収め、同党は一八八五年まで政権を担当する。選挙に際して、コーカス指導の中心になつたチェンバレンは、勝利の原動力はコーカス組織であつたと誇り、また、彼が新内閣の大臣に抜擢されたことは政党指導者もコーカス組織の威力を公的に承認したためだと一般に受取られた。しかし、オストロゴルスキーはこの選挙における保守党の敗北をコーカス組織の影響に帰せしめることをせず、他の諸要因の作用によるものとする<sup>(2)</sup>。彼は、コーカス組織が浸透していなかつた農村における穏健派の熱心な選挙活動が自由党の候補者を利する結果になつたことを重視し、さらに史上稀にみる腐敗選挙であつたこの総選挙の運動期間中にコーカス組織も有権者の獲得のためにさまざまな手段をためらわずに採つたことを指摘して、旧來の社会的習俗が特に農村において根強く温存

され、したがって旧勢力が消失していないことを強調する。そして、「コーカスの登場は、実在する勢力の対立物としてのみせかけの威力が政治的舞台に進出してきたことを意味する。コーカスが外観上有している威力を、現に存在する諸勢力は、あたかも実体をともなうものであるかの如く錯覚し、そのことが国民の意識にも作用した。そこで、人々はその威力に注意をほらい、これを考慮に入れて行動することになった<sup>(3)</sup>」と言う。

自由党内閣が発足した時点で、コーカスの大衆的政治運動組織としての性格は変質する<sup>(4)</sup>。それまでは、かりに外観上であっても国民の自発性に支えられてきたコーカスの反政府性は払拭され、コーカスは政府を擁護しその政策を議會で通過させるために活動する組織になった。コーカスの指導者は、政府に反対の意見を表明する議員に圧力をかけるよう地方コーカスに指令し、各種の集会や国会請願等に大衆を動員するよう指示する。このような活動により、地方コーカスには国家の重要な政策にたいする直接的参加の意識が芽生えたわけである。政府の協賛機関となったコーカスが、いかに迅速にデモンストレーションを組織し得たとしても、それは参加者が自己の義務を忠実に履行した結果にすぎないのであって人々の自発性はもはや生かされてはいない、とオストロゴルスキーは主張する<sup>(5)</sup>。彼にとつては、(1)特定の限られた目的のみを追求し(2)この目的に賛同した人々が他の点では異なる意見を発表する権利を留保しながら自発的に結集し(3)目的追求のために世論を喚起する系統的な活動を続ける組織こそが大衆組織なのであった<sup>(6)</sup>。したがって、コーカスはその発足当初においてはこれらの条件を充足するものであったと言えようが、一八八〇年以降、もはや大衆組織としての実態を具えていないことになる。

参加者の自発性を重要視するオストロゴルスキーの価値観からすれば、コーカス出身議員の独立性は当然に保持されるべきものであった。パーミンガム・コーカスの規定に倣っていずれのコーカスでも組織を離れて立候補できない仕組みになっていた。政権を把握した指導者たちはイギリス自由主義の正統な受託者たることを自認していたから、

農業労働者への選挙権の拡大、農業法の改正、選挙の腐敗防止のための罰則の強化等の法案を上程し、議会でこれらを通過させることを至上課題としてひきうけた。この課題を遂行するためにコーカスは議員にたいする拘束力を強め、綱領と規律の遵守を要求して議員の独立性を剝奪した。これに違反した議員にたいしてはコーカス組織内の大衆討議の結果非難決議がなされたり、選挙活動への積極的妨害がなされる状況であったから、多くの議員はコーカスの運営方式に内包されている原則上の問題を論ずることを避けて安全に当選する道を選び、結果として、投票機械に墮した。オストロゴルスキーは議員の資質を問題としてとりあげ、「議員は単なる代理人や代弁者ではないし、候補者を指名するコーカスも選挙民全体を代表するものでもなく、また誤りを犯さないとはいえない」という理由でコーカスへの忠誠宣誓を拒否したW・E・フォスターと、アイルランド自治問題に関するグラッドストーン提案に反対の意思表示をしたためコーカスから非難攻撃をうけて立候補を断念せざるを得なかったG・コーウエンの二人に理想の議員像を見出ししている。「自発性に支えられた個々人の努力、思想の独立性こそが行動のエネルギーを生み出す」ものでなければならぬからである。<sup>(7)</sup>オストロゴルスキーによれば、人間による責任ある政治の代りに機構による政治を導入したのが自由党コーカスに他ならないのであった。<sup>(8)</sup>

一八八六年に自由党は分裂した。帝国の統一維持を主張してアイルランドの分離に反対したチェンバレンと自治を認めようとするグラッドストンの対立が原因であった。<sup>(9)</sup>アイルランド問題にかんするコーカス連合の代議員大会で敗れたチェンバレンは支持者とともに議会に提出されたアイルランド自治法案に反対票を投じ、自由党を脱退する。法案を僅差で否決されたグラッドストーンは議会を解散して国民の信を問うが、この選挙で惨敗を喫した。この分裂がコーカスに与えた影響は大きかった。コーカスの組織者であり中心的指導者であったチェンバレンが急進派の立場からは当然と考えられていたアイルランド自治法案に反対したからである。当時、コーカスの総書記はパーミンガム・コ

コーカスの書記をつとめていたシュナドホーストであり、彼は党の指導機関である中央自由主義協会の書記をも兼務していた。チェンバレンとその支持者の党脱退の契機となった代議員大会における敗北は、シュナドホーストがグラッドストンを支持したことによるものであった。党の指導者およびコーカスの指導者間の対立についてコーカスの一般会員は拱手傍観するのみであった。「ただ拍手喝采する集団たるべく訓練されてきた人々が、いきなり芸術の批評家になることを要求されてもできるものではない」<sup>(10)</sup>のであった。チェンバレンとともに、コーカスの指導的立場にいた人々、社会的影響力をもった人々、尊敬されていた人々、いわゆる穏健派も党を去った。その結果コーカス組織の同質性・統一性は高められた。急進主義者との摩擦はおこらず、コーカス活動の阻害要因もなくなった。しかし、コーカスの独立性は喪われ、コーカスは党の公式指導部の網の目にとりこまれた<sup>(11)</sup>。不寛容な精神がコーカスを支配し<sup>(12)</sup>、コーカスはもはやイギリス自由主義の代表者ではなく、世論の代弁者でもなくなった<sup>(13)</sup>、とオストロゴルスキーは結論づけている。

(一) M. Ostrogorski, op. cit. p. 180.

(二) 彼は以下の諸要因を列挙する。(1) グラッドストンの個人的名声——反トルコキャンペーンに際して彼がなしたように群衆を感動させる巧みな演説を行ったこと——(2) デイズレリーの冒險的外交——人々に国の安定を損うのではないかという危惧の念を惹起せしめ、その結果彼を政権からひきずり下ろすことの必要性を穏健派にまで認識せしめたこと——(3) 経済危機——政府のなし得ることは限界があるにもかかわらず、一般大衆はすべて政府の責任だと考えたこと——(4) コーカスによる大都市の新有権者の獲得——コーカスが一種のブームをひきおこし、彼らをまとめて投票所に運んだこと——(5) 穏健派の農村選挙区における善戦——コーカス組織は農村に浸透していなかったのであるから、穏健派の選挙活動がコーカスの活動に協力する結果となったこと——(6) 「豊富な資金をもつ保守党の候補者」の敗北——新しい候補者を支持するコーカスが資金の援助をしたこと——。

以上の諸要因が存在しなければ、自由党の勝利はあり得なかつたわけで、したがって、コーカスの威力が積極的貢献をなしたと

- は言い難い、とオストロゴルスキーは結論づけるわけである。 op. cit. pp. 192-193.
- (3) op. cit. p. 193.
- (4) op. cit. pp. 194-196.
- (5) op. cit. p. 197.
- (6) これらの条件に適った組織として、彼は一八六四年にマンチェスターで結成された選挙法改正連合と、一八八〇年以降に設立され、ロンドンを中心に活動していた自由主義協会をあげている。
- しかし、前者は一八八〇年選挙の後、後者は一八八五年選挙における自由党の敗北の後、規約を改正してコーカスに吸収された。 op. cit. pp. 204-209.
- (7) W・E・フォスターは一八七〇年の初等教育法の成立を強力に推進した一人で、自由党内閣の大臣を務めた人であるが、選挙区のブラッドフォード自由党連盟の大半は宗教上の理由から彼に敵意を抱いていた。連盟規約には「ブラッドフォード地区から立候補する者は連盟の決議に全面的に服従することの宣誓を要請される」旨が定められていた。一八八〇年の選挙に際して宣誓を拒否したフォスターと連盟のあいだで、議員の独立性をめぐって激しい議論がなされた。この対立は結局、規約の文言を修正することで解決された。 op. cit. pp. 181-224. なお、横越英一、前掲書、四三三―四三五ページ、池田清、前掲書、三二―三三ページ参照。
- G・コーウェンはなが年にわたって労働者のために献身的に活動してきた政治家で、選挙区の信望が篤く、一八八六年の選挙の際、ニューキャッスル・コーカスが候補者として指名する旨を申し出た。しかしコーウェンは自己の主張をまげず、考え方の相違を理由として指名候補者になることを拒んだためにコーカスの集中攻撃をうけて立候補をとりやめた。 op. cit. pp. 215-216.
- (8) op. cit. p. 596.
- (9) この経過は池田清、前掲書、五五―一三三ページに詳しい。なお、横越英一、前掲書、四三六―四四〇ページ参照。
- (10) op. cit. p. 269.
- (11) op. cit. p. 280.
- (12) op. cit. p. 286.
- (13) op. cit. p. 274.

### 第三章 自由党コーカスの崩壊

一八九一年に自由党はニューキャッスル綱領を採択する。これはコーカスの年次大会で自由党の次期選挙綱領として決定されたものであり、極めて多岐にわたる項目を総花的に列挙したものであった。本来一政策にすぎないアイルランド自治法案がオーソドクシーにまで高められたことを契機として顕在化した内部対立が、チェンバレン派の脱退のちもなお存在していたことをそれは示している。意見を異にする者を一掃した結果コーカスの同質性が確立されたとみなしたのは指導者の幻想であった。対立激化の一因として労働者グループの抬頭があげられる。社会主義思想を学んだ労働者たちにとって自由党はもはや利益代表ではなかった。そこで彼らは選挙への協力とひきかえに自己の要求を政策に反映させることを求めたのである。ニューキャッスル綱領で選挙に臨んだ自由党は一八九二年に辛うじて多数派を確保する。しかし、ニューキャッスル綱領は履行されず、大衆の党であると広言していた自由党は中間階級を掌握することさえできず、指導者と大衆の疎隔は深まるばかりであった。一八九三年の独立労働党の結成、新組合主義運動の激化、これに対する資本家側の反動化等、ますます複雑さを加え流動化する状況に対処するためには、内部抗争をかかえた自由党は無力であり、また集票力を楯として党を支えてきたコーカスも無力であった。グラッドストーン引退ののち内閣をひきついだローズベリは議會を解散し、一八九五年の選挙で自由党は敗退する。この時点でコーカスは事実上崩壊した。

オストロゴルスキーは「コーカスのパースペクティブを歪めることなく、イギリスの政治秩序の一般的枠組のなかで、社会例えば人間性の進化のなかで」これを観察し、記述しようとした。彼はコーカスを大衆的政治組織であると規定し、その発展の段階を追いながら政治社会との関連を解明して、コーカスの弊害を鋭く批判している。前述のよ

うに、階級論的アプローチと規範論的アプローチが併用されているために彼の議論は必ずしも明快とは言い難いが、批判の視角は(1)コーカスに組みこまれた大衆にむけられたものと(2)コーカスの機構および運営にむけられたものに大別できると思われる。

(1) 第二次選挙法改正により新たに政治への参加を認められた下層中間層および労働者層は十分な力量を備えていないにもかかわらずコーカスを媒介として積極的に政党活動に参画しはじめた。これら新しい政治参加者の生活は未だに古い習俗 (Habits) によって律せられていたから、彼らは「民主的」なコーカス制度を自らのものとして運用する能力をもたず、コーカス指導者の差し出す誘惑の手に容易にのせられた。コーカスが行った「組織化」は、感情や情熱に訴える煽動であり、これにひきつけられた大衆は、コーカスに参集した。それまでの支配層であったブルジョアジーは大衆の協力がなければ政党・コーカスを運用し得ないことが明らかであったから、大衆操作のための煽動やワイア・プリングの技術を駆使するのは当然であった。下層中間層および労働者階級から輩出した指導者は、旧来の「独立心に富み、思慮深い名望家」ではなく「熱狂的で偏狭な党信奉者」であり、コーカス組織を媒介として社会的階梯を上昇し「社会的尊敬」の配分をうけようとする者であった。こうして大衆の側にはスノビズムが生れる。このような現象は、習俗がまだ低い状態にとどまっていることを示すものである。

(2) コーカスの一般会員・支持者の状況はコーカスの内部活動にも影響を及ぼす。コーカスは旧い指導者階級が保持していた党の指導権を、大衆の直接参加による多数決制を基盤とする民主的な指導体制に変革しようとする理念の下に組織されたものであった。したがってその組織は形式上地方分権的性格が強いものになった。しかもコーカスは自由党の組織上の統一性を維持する守護者をもって任じていたわけであるから、その末端組織に至るまで一個の意思によって統率しなければならなかった。コーカスの指導者は原則上の討論を一般会員のレベルで深めさせる努力を回

避して、メンバーの感情を一定の状態に常に保つことよって組織の統一を維持した。これは知的日和見主義に他ならない。そこにはその場しのぎの妥協や利害の対立するグループ間の調整があるだけで「道理に基づく政治原則」は全く存在しなかった。ファナティズム、他人の意見に対する不寛容、党への献身的奉仕活動が溢れていたコーカスには、情緒過多なデモクラシーが育った。「コーカスの基本路線や方法のみを踏襲する地方組織のメンバーにとつては、党の公式的見解に無条件に服従する」ことこそが美德なのであった。<sup>(8)</sup>コーカスの機構が外面的・形式的になるにつれて自由党の指導者も変質する。コーカスから選出される議員の資質は低下した。かつて党内で重要性をもっていた「由緒ある社会階層出身の指導者」という指標は「熱意ある活動家、熟練した組織者」という指標にとつてかわられた。<sup>(9)</sup>しかし、コーカスを形成した階層からは優れた指導者は生れず、結局、グラッドストンを頂点とする旧来の指導者に依存せざるを得ない状況がつづく。したがって、コーカスが当初の目標とした「指導者の独占体制の打破」は「いささかの变化」を指導層にもたらしたにすぎなかった。

コーカスは議員の多数派を制し、政府を自らの手で運営した。しかし議員は党のオーソドクシーを議会における行動の基準にすることをコーカスによって義務づけられていたから、彼らの理性や良心は眠らざるを得なかった。議員と有権者の間をコーカスが隔てた。議会における活動の監視役が有権者からコーカスに代ったからである。議員はコーカスが課した義務を従順に守り、その結果、議員個人の責任と独立の衰退および尊厳の低下が進行する。結局、コーカスが謳った「イギリス政治社会の民主化過程の促進」も、外観上・組織上成功しただけであった。コーカスの活動は、実態としては、選挙のレヴェルを低下させ、政治家の自律的思考を抑圧し、有権者の意思を拘束し、リーダーの資質・人格的識見の優秀性を損なわしたのであった。<sup>(10)</sup>

このようにオストロゴルスキーのコーカスにたいする評価は極めて否定的である。前述のように、彼は選挙権の拡

大をデモクラシーの發展とみていたわけであるから、大衆を組織的に政治の舞台に登場させたコーカスについて、民主化を促進させる方向で一定の役割を果たした、と考えることも可能だつたはずである。にもかかわらず、詳細な分析の上で批判的結論に到達しているのは、コーカスの機能がオストロゴルスキーのデモクラシー観と相容れない性格を有していたからだと思われる。彼は「大衆の公共心の向上がデモクラシーの唯一の基準である」と考えていた。この曖昧な、しかしそれゆえに万能な倫理的基準からすれば一八六七年の選挙法改正に伴って出現した「デモクラシー」は人々の公共心を高めるものではなかつた。イギリス国民のなかに残存する習俗は制度の導入によって一挙に民主化され得べくもないからである。コーカスが掲げた「人民にたいする信頼」という標語は「正しいこと・合理的なこと」を内容とするものではなく「民衆的なこと」を崇拜の対象として表示したにすぎない、とオストロゴルスキーは言う。<sup>(10)</sup>彼の思考の基盤には「民衆」「大衆」「群衆」と「個人」との対置があつた。そして彼は常に「個人」に絶対的な価値を付与する。その内容はきわめて理念的であり、例えば「人間的威厳をそなえ、理性を働かせ、精神的高貴さに溢れた人」であつたり「思想の自由と独立性を維持する人」であつたりする。<sup>(11)</sup>イギリス社会で、その具体的イメージを探す場合には、コーカスに代表される新自由主義者ではなく、かつて指導者層を形成していた旧自由主義者たち、ということになるわけである。<sup>(12)</sup>オストロゴルスキーにとって「大衆」は教育されねばならない者であつた。<sup>(13)</sup>そしてその役割を担うのが、コーカスに結集した「自由な個人」でなければならないのであつた。彼の期待に反したコーカスの実態に批判の矢をむける基点のひとつはこの価値観にあつた、と言つてよいであらう。

(1) 例としては、ロンドンの労働者クラブがあげられる。一八八六年以降、コーカス指導部は各地方コーカスの再編成・統合を計画する。ロンドン地方の各コーカスの代表者から成る総会の席上、労働者クラブの代表は統合計画に反対したばかりでなく、コーカスの名称として「急進的」という形容詞を付することに抗議の意思を表明した。労働者クラブの意向としては「自分たちこそ、そ

- して自分たちだけが急進派の名に値する」のであった。 op. cit. p. 290.
- (2) op. cit. p. 574.
  - (3) たとえば吉瀬、前掲論文は「事実認識におけるリアリズムが既存の古典的政治理論の体系全体と真正面から対決させられるまでに至らなかったが故に、彼の理論の中で事実分析と結論が矛盾」していると言う。吉瀬、六七ページ。
  - (4) ジョン・ブライトの言葉を引用して「この選挙法改正は二十年早すぎた」と言う。 op. cit. p. 544.
  - (5) op. cit. p. 540.
  - (6) op. cit. pp. 549-554.
  - (7) op. cit. p. 555.
  - (8) op. cit. pp. 568-569.
  - (9) op. cit. p. 547.
  - (10) op. cit. p. 549.
  - (11) op. cit. p. 548.
  - (12) op. cit. p. 549.
  - (13) op. cit. p. 176 sq.
  - (14) ロンドンの自由主義協会の宣言のうち「政治教育こそ自由主義の生命であり血である」という文言に彼は強く共鳴している。 op. cit. p. 209. なお、第二章注(6)参照。

### おわりに

オストロゴルスキーのコーカス批判は、すでにみたように、議会議主義の確立と個人主義の保持を支柱とするイギリスの古い自由主義を思想的基盤として展開されたものであった。この古い自由主義は「ジャコバン精神を嫌悪し、あらゆる形態の権威主義を否定し、堅い信念をもって原則を持ち、政治におけるセンチメンタリズムを拒絶し、それと

ともに群衆・モップにたいする少しばかりの輕蔑と恐怖<sup>(1)</sup>を持つものであった。個人の徳目として挙げられるのは人格的尊嚴・熟慮・寛容・獨立心等であり、これらはオストロゴルスキーがコーカスを批判する際に採用した尺度にほかならない。この点をとらえて、パーカーおよびジョンストンはオストロゴルスキーの思想を「個人主義的・合理主義的・貴族主義的」であると評し、彼を「時代遅れの自由主義の最後のささやかな抵抗」を行った人物である、と位置づけている<sup>(2)</sup>。

しかし、彼は優れた歴史感覚の持主であり、民主的政治の歴史を「幅広い諸傾向」をもつものとして理解していた<sup>(3)</sup>から、眼前で進行している事態を固定的に、また、後向きにとらえていたわけではなかった<sup>(4)</sup>。旧い自由主義やそれが想定していた政治制度が葬り去られるものであることも自覚していた<sup>(5)</sup>。その彼がもはや支配的な思想でなくなった旧自由主義を頑固に保守したのは何故であろうか。

オストロゴルスキーは、歴史における個人の選択を重視し、歴史は叙述することができるものであるばかりでなく、勧告することができる対象であると考えていた<sup>(6)</sup>。その姿勢はここでとりあげている著書でも貫かれていた<sup>(7)</sup>。彼は眼前ですすみつつある政党の推移を研究対象とした外国人であった。それゆえ、イギリス人が迫られている価値観の変革を自己の作業としてひきうける過程を経ずに、時代遅れの思想に立脚したまま対象に没入することが可能だったのであり、そのことが、彼にコーカスリーダーへの「勧告」をなさしめる一因となったのではあるまいか。

一九〇四年にオストロゴルスキーは帰国し<sup>(8)</sup>、一九〇五年革命の後開設された第一国会にグロドゥノ地方のユダヤ人代表の議員として選出された。議会ではカデットに近い立場をとった<sup>(9)</sup>。政治目標として立憲議會制の実現を求めるカデットと協力関係にたつことは彼のコーカス論からうかがい得る政治的見解の延長であったと思われる。欧米諸国の政治制度についての彼の造詣が議員活動でどのように発揮されたか、またロシアの現実の政治状況に彼がどのよう

に対応したかを詳細に語る資料はない。<sup>(10)</sup>ただ、G・ウォーラスが「ロシアの貴族階級と対等に闘う力をつけるためには、自由な個人の自発的な集団ではなく、ひとつの党、信頼され服従を勝ち得るような政党にならなければならないことを（オストロゴルスキーとその仲間）身をもって悟ったにちがいない」と述べていることは興味ふかい。一九〇六年に第一国会が解散されたのち、彼は政治活動から退いた。

オストロゴルスキーが帰ったロシアには、彼がイギリスでみたような「民主的な」選挙制度もコーカスのような機構を抱えこんだ政党もなかった。大衆はソビエトに集結しつつある状態で、彼の自由主義思想を現実根づかせる土壤は皆無であった。学問としての政治学が育つ環境もなかった。一九二七年に彼の著書がロシア語に翻訳されて出版されたとき、序文をよせたA・E・パシユカーニスは、オストロゴルスキーの見解は「当時のいわゆる『自由主義的なロシア社会』の水準をそのまま示すもので」あると述べ、彼は「中程度の自由主義的俗物」にすぎないと評した。<sup>(11)</sup>政治活動から引退したのち、彼は研究生活に戻るが、ロシアの現実の推移、とくに政党外大衆運動としてのソビエトについてはついにふれないうちに終った。<sup>(12)</sup>ロシア知識人の一典型としての彼の像はこの点にも求められよう。

(1) Ostrogorski, *op. cit.* pp. 176-180.

(2) Rodney Barker & Xenia Howard-Johnston, "Politics and political ideas of Moisei Ostrogorski" *Political Studies* XXIII No. 4 p. 422, 429. なおこの論文は「オストロゴルスキーは、議会制デモクラシーの黄金時代のなかに、理性と優れた人格的資質をめぐりリーダーシップの承認に基礎づけられた自由な政体をみた」とする。

(3) *Ibid.* p. 422, 423.

(4) 例えば急進主義者として出発したチェンバレンが、ユニオニストの同調者、帝国主義擁護者、保護関税論者と変身を重ねてゆく過程を論じた部分(Ostrogorski, *La démocratie et partis politiques*, 1912, p. 131 sq.)や自由主義の破産を断言している部分(*op. cit.* p. 293 sq.)など。

(5) 彼は、旧い自由主義は「コーカスが登場したときには、もはや息絶えていた。コーカスはその墓掘人にすぎない」と言う。

op. cit. том. 1. p. 226.

(6) Barker & Johnston, *ibid.* p. 422, 423.

(7) 自由党コーカスに触発された若いトリー党員が「民衆的トリー主義」をかかげたことをとりあげて、これを蒸気機関車にたとえ、彼らは緩衝器や安全バルブの役割ではなく汽罐になること望んでいる、とオストロゴルスキーは評価する。若いトリー党員たちは、保守主義の何であるかを自覚していない、と彼はきめつけ、保守党のすすむべき道は、自由党から「自由」を横取りして平等と闘うことにある、と述べている。op. cit. pp. 259-260.

(8) 彼は一八八二年に出国し、仏・英・米で研究、著述に専念していた。出国の動機は不明である。ロシアでは一八八一年にアレクサンドル二世が暗殺され、その直後、南部・南西部でボグロームが荒れ狂った。これらをきっかけにしてロシア政府の反動化が強まるなかで、ユダヤ人である彼には平穏な生活の条件がなかった、と考えられる。今日のソビエトの百科辞典には彼の項目はない。わずかにグラナート百科に記載されているのみである。比較的詳細な紹介がなされているのは、以下の二点である。Ерпекская Энциклопедия, 1912-1914, том. 12, Encyclopedia Judaica, 1972, vol. 12. 後者によれば、彼は一八七五年から司法省立法課に勤務しており、一八八二年には立法課課長に任ぜられている。「ツァーリの反動的政策が強まると同時に、彼は辞職し、国を離れることを余儀なくされた」ことは容易にうかがえよう。

なお、ボグロームについては原暉之氏による以下の諸論文を参照。

(1)「近代ロシアにおけるユダヤ人およびユダヤ人問題」『愛知県立大学外国語学部紀要』八号、一九七三、一一七一ページ、(2)「ロシア社会運動とユダヤ人問題」『えうゑ』一九七六、三、一二四—一三四ページ、(3)「ユダヤ主義とロシア・ユダヤ人社会」『思想』一九七七年、二二、二二—三六ページ。

(9) 第一国会ではユダヤ人議員一四名のうち一一名がカデットに所属していた、という。原、前掲(1)論文七〇ページ、注<sup>22</sup>。なお、一九〇六年に、オストロゴルスキーはアメリカのクリップランド大学の政治学教授に招携されたが、国会議員に選出されたことを理由に辞退した。M. Ostrogorski, *Democracy and the party system in the United States*, 1926, p. V.

(10) 国会における活動については成田、前掲論文、二九ページ、Государственная Дума, Стенографические Отчеты, 1906. Сессия, 1. стр. 1784-87.

- (1) Graham Wallas, *Human Nature in Politics*, 1924, p. 144. なお、石上良平、川口浩訳「政治における人間性」一九五八、一三三ページ。
- (12) М. Острогорский. *Демократия и политические партии*, Том. 1, 1927, стр. 5. ベシユカーニスは、オストロゴルスキーの政党研究を「どんなマルクス主義的なアンソロジー」にも加え得るものであると評価している。
- (13) その後の彼の業績としては以下のものがある。Democracy and the Party System in the United States: a study of extra-constitutional government, 1910. La démocratie et les partis politiques, 1912. “Конституционная эволюция Англии I-IV” Вестник Европы, 1913.